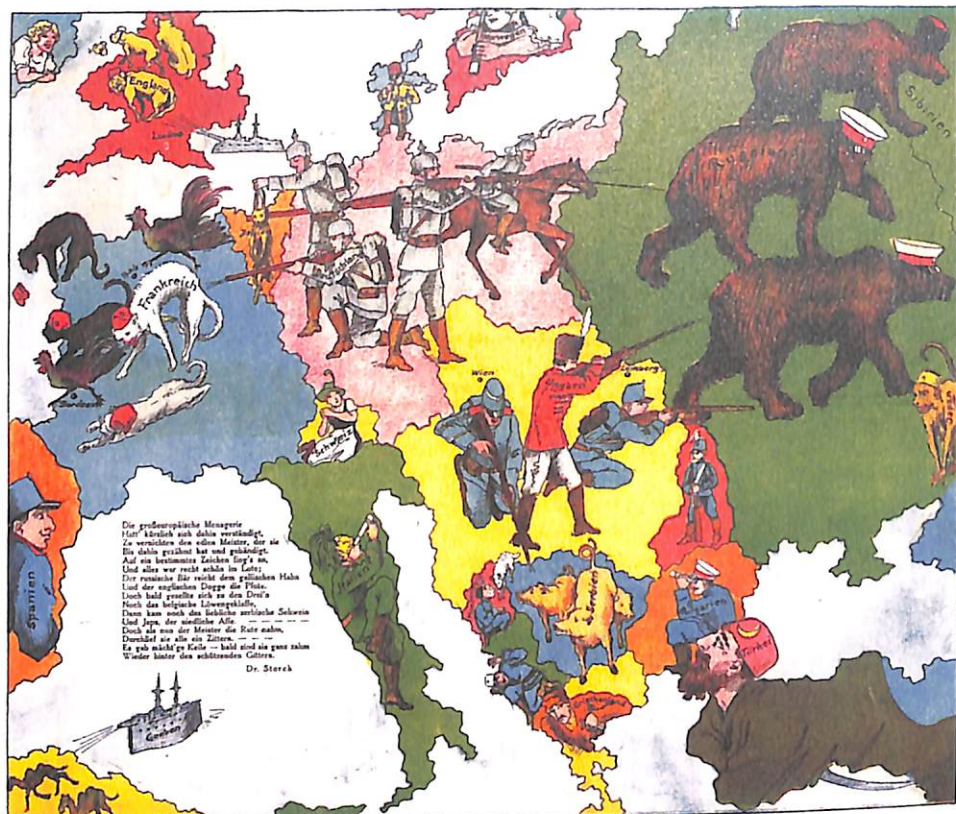


【執筆】

馬場 優  
浅田進史  
左近幸村  
渡辺千尋  
河合康夫  
井野瀬久美恵



# 第一次世界大戦 開戦原因の再検討

国際分業と民衆心理

小野塚知二【編】

# 目次

## 序章 第一次世界大戦開戦原因の謎——通説の問題点と現代的意義……小野塚知二 1

はじめに 1

### 一 これまでの開戦原因論 2

- 1 日本における通説
- 2 通説の改訂版
- 3 欧米での開戦原因研究
- 4 経済史研究と開戦原因

### 二 新しい開戦原因論の必要性和可能性 13

- 1 開戦原因を問い直すことの意義
- 2 原因論的方法的な二類型
- 3 統一的な枠組みの必要性和可能性
- 4 もう一つの統一的な枠組み——オスマン帝国の蚕食過程

### 三 開戦原因の謎——何が説明されなければならないか 23

- 1 サライエヴォ事件から開戦までの当事者の拡大
- 2 イタリアと他の主要参戦国との相違
- 3 躊躇・逡巡と開戦への傾斜
- 4 ことにイギリスの開戦決定
- 5 平和主義思想の無力さ
- 6 異なる状況下での戦争熱の共通性
- 7 本書では解けない問題——予想された戦争と世界大戦への拡大

## 第I部 外交・植民地・経済政策

## 第1章 ヨーロッパ諸大国の対外膨張と国内問題

馬場 優 41

はじめに 41

一 ヨーロッパ諸大国の対外膨張と大戦勃発の関連性 42

1 ファシヨダ事件(一八九八年)

2 二つのモロッコ危機(一九〇五、一九一二年)

3 中央アジアをめぐる英露の「グレート・ゲーム」(一九世紀—一九〇七年)

二 フィッシャー論争とその影響 55

1 フィッシャー論争

2 フィッシャー論争のインパクト

三 ハプスブルク帝国と大戦勃発 60

1 ハプスブルク帝国の内政と外交

2 帝国をめぐる国際環境の悪化

3 サライエヴォ事件から第三次バルカン戦争へ

おわりに 67

## 第2章 開戦原因論と植民地獲得競争

浅田進史 69

一 開戦原因論と植民地戦場 69

二 植民地獲得競争と門戸開放 73

1 世界分割の論理

2 ドイツ植民地支配と門戸開放の論理

三 世界再分割への意志と予期しない世界戦争 81

四 植民地戦争から第一次世界大戦へ 83

## 第3章 経済的相互依存関係の深化とヨーロッパ社会の変容

左近幸村 89

はじめに 89

一 大戦前ヨーロッパ経済の概観 92

二 世紀転換期のドイツ社会とナシヨナリズム 98

三 経済史から見たドイツ責任論 102

四 ロシアとドイツの経済関係 106

五 バルカンをめぐる角逐——ロシアの自由港制との関連から 111

まとめ 116

## 第II部 民衆心理とさまざまな思想

## 第4章 平和主義の限界——国際協定の試みと「祖国の防衛」

渡辺千尋 125

はじめに 125

- 一 世紀転換期のフランスと平和主義 126
  - 1 法的平和主義の源流
  - 2 フレデリック・パシーとノーマン・エンジェル
- 二 社会主義における平和・戦争・外国人 132
  - 1 ナショナルリズムと外国人労働者の排斥
  - 2 社会主義的平和主義
- 三 第一次世界大戦の開戦の経緯と反戦運動 138
  - 1 国際社会主義者の反戦運動
  - 2 一九一四年七月の危機と反戦運動の挫折

おわりに 144

第5章 国際分業論の陥穽——自由貿易と国際的相互依存……………河合康夫 149

はじめに 149

- 一 一九世紀イギリスの自由貿易論と国際的相互依存——コフデンの場合 151
- 二 第一次世界大戦前の国際的相互依存論——ノーマン・エンジェルの場合 154
- 三 第一次世界大戦と国際的相互依存論(一)——シユムペーターの場合 157
- 四 第一次世界大戦と国際的相互依存論(二)——ホブスンの場合 163

おわりに——国際分業論の陥穽 166

第6章 民衆感情と戦争——イギリスにおける「戦争熱」再考……………井野瀬久美恵 177

はじめに 177

- 一 戦争を支持する民衆たち——「戦争熱」とは何だったのか 180
  - 1 「戦争熱」のかたち
  - 2 「戦争熱」の出身
  - 3 広義の「戦争熱」
- 二 「戦争熱」の培養——南アフリカ戦争という経験 191
  - 1 「戦争熱」の参照軸
  - 2 メディアの戦争
  - 3 マフェキングの群衆
- 三 南アフリカ経験のゆくえ——攻めの愛国心から護りの愛国心へ 198
  - 1 「国民の効率」改善と少年組織
  - 2 ドイツとの近未来戦争小説
  - 3 戦争を利用するミュージック・ホール

むすびにかえて——グレイ外相演説の背後 208

終章 戦争を招きよせた力——民衆心理と政治の畏……………小野塚知二 215

はじめに 215

- 一 謎を解く方向性 217
  - 1 ナショナルリズムの強さ
  - 2 「戦争熱神話」という神話
  - 3 「戦争熱」という共通性
- 二 民衆心理、世論、政治 226

1	民衆心理の所在と証明方法	
2	戦争当事国の拡大と各国の共通性	
3	イタリアと他国との相違	
4	ナショナリズムの二類型——二人のチェンバレン	
5	各国の躊躇・逡巡とイギリスの参戦	
三 民衆に注目することの意義		
1	理性と情緒	246
2	民主主義と戦争原因論	
	むすびにかえて	250

## 討論記録

齋藤翔太郎・杉山遼太郎 257

## あとがき

小野塚知二 265

## 索引

## 序章 第一次世界大戦開戦原因の謎——通説の問題点と現代的意義 小野塚知二

### はじめに

第一次世界大戦は、それ自体が大きな災厄であり、また、その後の経済・社会の組織化を加速し、財政を肥大化するなどさまざまな点で不可逆的な変化をもたらしただけでなく、大恐慌、第二次世界大戦、冷戦の原因ともなり、「短い二〇世紀」全体を規定したできごとであった。さらに一八七〇年代以降開戦直前まで維持された世界経済の緊密な相互依存関係を分断し、この関係の中で可能であった安定的で多角的な経済発展を解体したという意味では、戦争が常に外交の失敗であるという以上に史上まれに見る深刻な大失敗であったということもできよう。<sup>(1)</sup>一九九〇年代に喧伝された「グローバル化」とは、密接な相互依存関係にあった第一次世界大戦前の世界経済と似た状態を、冷戦とともに終焉を迎えた「短い二〇世紀」の後になってようやく回復できるという期待の込められた語であったと理解しうる。

ところが、これほどの大事件であるにもかかわらず、それが発生した原因については意外なほどに貧弱な解釈しか用意されていない。本書は、第一次世界大戦の開戦原因について多面的かつ総合的に考察して、新しい解釈の枠組みを提示することを目指す。